

# ラベル理論における主要部の（不）可視性と移動の随意性

菅野 悟  
田中祐太  
大塚知昇  
近藤亮一

## 1. 名詞句の移動と対併合

本発表の目的は、例外的格標示構文(Exceptional Case Marking (ECM) construction)に存在する移動の随意性を、併合方法へと還元することである。まず、次の *there* 構文を考えてみる。

(1) a. \*There is likely [ $\alpha$  a man to be t in the room]

b. There is likely [ $\alpha$  t to be a man in the room]

(Epstein, Kitahara and Seely (2014: 468))

Epstein, Kitahara and Seely (EKS) (2014)は、(1)の対比を観察し、*symmetry breaking* の考え方が A 移動にも適用できると主張した。この結果 Merge over Move の考え方が破棄され、ラベル付けの観点から、(1)に見られる素性共有がない位置からの移動の義務性に説明が与えられた。しかし、言語には義務的な移動だけではなく、随意的な移動も存在する。本発表では、この随意性は併合操作の適用方法に還元されると主張する。

本発表では Chomsky (2013, 2015)により提案されたラベル付けの理論を採用する。Chomsky (2015)では以下の動詞句内部構造が提案された。(以下、網掛けは不可視性を表す。)

(2) [<sub>VP</sub> R(-v\*) [<sub><φ, φ></sub> DP [<sub>RP</sub> R t<sub>DP</sub>]]]

(2)の構造においては、DP が R と素性共有の関係に入り、<φ, φ>というラベルが形成される。また、これにより R がラベル付け可能となり、RP のラベルが形成される。さらに、R が v\*と対併合(Pair-Merge)することにより、v\*が不可視的となる。重要な点として、Chomsky (2015)で示された派生では、v\*が不可視的となる。

本発表では Otsuka (2017)の対併合の提案を拡張し、次の可能性があるとは主張する。

(3) [<sub>VP</sub> v\*(-R) [<sub><φ, φ></sub> DP [<sub>RP</sub> R t<sub>DP</sub>]]]

この構造では、R が不可視的となる。このように、動詞句には 2 種類の派生が存在し、どちらの構造からも ECM 構文が派生されると主張する。

## 2. 分析

この節では ECM 構文の特徴を概観し、その後、本発表の分析を提示する。

(4) a. Mary made John out to be a fool.

b. Mary made out John to be a fool.

(Lasnik (2001: 112))

(5) a. the DA made no suspect<sub>i</sub> out to have been at the scene of the crime during his<sub>i</sub> trial

b. ?\*the DA made out no suspect<sub>i</sub> to have been at the scene of the crime during his<sub>i</sub> trial

(Lasnik (1999: 201))

まず、(4)が示すように、ECM 構文の対格名詞句は、不変化詞の前後どちらでも生起可能である。また、(5)が示すように、不変化詞より上位に移動する場合、主節まで移動をし、主節の要素を束縛することが可能である。これら、ECM 構文に観察される移動の随意性、及び、構造上の位置に対し、以下、説明を与える。

名詞句が上位に移動する構造は(6)に示され、名詞句が下位に留まる構造は(7)に示される。

(6) [<sub>VP</sub> Subj R(-v\*) [<sub><φ, φ></sub> DP [<sub>RP</sub> R [ T<sub>io</sub> ]]]]

(7) [<sub>VP</sub> Subj v\*(-R) [R [<sub><person, person></sub> DP [TP T<sub>io</sub> ]]]]

まず、(6)では Chomsky (2015)で仮定されているとおり、v\*が不可視的となる。DP が下位から移動し、R と素性共有をし、<φ, φ>のラベルが得られる。一方、(7)では、R が不可視的となる。この時、v\*は値未付与素性を下位の主要部に継承させる必要があるが、R は不可視的となるため、さらに下位の T<sub>io</sub> への継承が選択される。また、長距離に継承されるのは、[person]のみであると考えられる。その理由は、[number]は長距離一致が可能であり、[person]のみが局所的な関係を必要とするためである(Baker (2008))。

## 3. there 構文

この節では、本発表の提案に基づいて(1)を分析する。構造は次のようになる。

(8) a. \*[ C [<sub><person, person></sub> there T [likely [TP a man T<sub>io</sub> be a man in the room]]]]]

b. [ C [<sub><person, person></sub> there T [likely [TP T<sub>io</sub> be a man in the room]]]]]

(8a)の構造は(1a)に対応する。(8a)では a man が T<sub>io</sub> の指定部へ移動する。この移動が生じ、さらに、a man と T<sub>io</sub>

の間で素性共有が行われるためには、C から T<sub>0</sub> に素性が継承される必要がある。しかし、前節で述べたとおり、長距離素性継承を生み出すのは、主要部が不可視的となる場合である。(8a)で上位の T が可視的のままであり、この T を越え、T<sub>0</sub> へと素性が継承されることはない。一方、(8b)の構造は(1b)に対応する。この構造で、C から T へと[person]素性が継承される。there と T の間で素性共有が行われ、<person, person>というラベルが形成される。また、[number]は C に留まり、a man と長距離の一致関係に入る。このように a man の移動は不必要であり、生じることはない。

#### 4. 上位への移動の優先性

この節では、今までの例とは異なり、不変化詞を含まない ECM 構文について論じる。不変化詞が存在しない場合、対格名詞句の統語上の位置が不明となる。この時、以下に観察される抜き出しの対比が重要となる。

(9) a. \* Who<sub>2</sub> did John make [friends of t<sub>2</sub>] out [t<sub>1</sub> to be smart]?

b. ? Who<sub>1</sub> did John make out [[friends of t<sub>1</sub>] to be smart]?

(Boeckx and Hornstein (2005: 36))

名詞句が不変化詞より上位に移動する場合、内部からの抜き出しが阻止され、下位に留まる場合、そのような抜き出しが可能となる。この対比に基づき、不変化詞が存在しない次の文を検討する。

(10) \*Who did you say John expects [friends of t] to call Mary?

(Runner (1998: 164))

一般に不変化詞が存在しない場合であれ、大部分の話者は、名詞の内部からの抜き出しは許容せず、名詞句は上位へ移動していると考えられる。この理由としては、(11)が機能していると考えられる。

(11) 可能な限り [person] と [number] を同一の主要部に継承することが好まれる。

#### 5. that 補部節

最後に、that 節が補部位置に生じる文の派生について論じる。

(12) a. John thinks that he will win.

b. [EA [<R, v\*> [<sub>α</sub> R [<sub>β</sub> C ... ]]]]

(cf. ESK (2016: 90-91))

EKS は、(12a)のような文は R と v\*の外的対併合(external Pair-Merge)により派生されると主張する。この派生の v\*は、<R, v\*>の形成により不可視的となった状態で、派生に導入される。しかし、この分析では、v\*が不可視的となるため、外項への θ 役割付与子が存在しないことになる。本発表では、that 補部節を伴う文も、(3)のように派生されると主張する。R は不可視的となるが、v\*が可視的のままであるため、外項への θ 役割付与が可能となる。

#### 参考文献

- Baker, Mark C. (2008) *The Syntax of Agreement and Concord*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Boeckx, Cedric and Norbert Hornstein (2005) "On Eliminating D-Structure: The Case of Binominal *Each*," *Syntax* 8, 23-43.
- Chomsky, Noam (2013) "Problems of Projection," *Lingua* 130, 33-49.
- Chomsky, Noam (2015) "Problems of Projection: Extensions," *Structures, Strategies and Beyond: Studies in Honour of Adriana Belletti*, ed. by Elisa Di Domenico, Cornelia Hamann and Simona Matteini, 3-16, John Benjamins, Amsterdam.
- Epstein, Samuel D., Hisatsugu Kitahara and T. Daniel Seely (2014) "Labeling by Minimal Search: Implications for Successive-Cyclic A-Movement and the Conception of the Postulate 'Phase,'" *Linguistic Inquiry*, 45, 463-481.
- Epstein, Samuel D., Hisatsugu Kitahara and T. Daniel Seely (2016) "Phase Cancellation by External Pair-Merge of Heads," *The Linguistic Review* 33, 87-102.
- Lasnik, Howard (1999) "Chains of Arguments," *Working Minimalism*, ed. by Samuel D. Epstein and Norbert Hornstein, 189-215, MIT Press, Cambridge, MA.
- Lasnik, Howard (2001) "Subjects, Objects, and the EPP," *Objects and Other Subjects: Grammatical Functions, Functional Categories, and Configurationality*, ed. by William D. Davies and Stanley Dubinsky, 103-121, Kluwer, Dordrecht.
- Otsuka, Tomonori (2017) "On Two Ways of External Pair-Merge," *Proceedings of GLOW in Asia XI*, volume 2, 135-146.
- Runner, Jeffrey T. (1998) *Noun Phrase Licensing*, Garland, New York.